

## 「多様性について考える学習会～障害の社会モデルから～」開催報告

2025年3月

明治学院大学社会学部附属研究所 相談・研究部門

「多様性について考える学習会～障害の社会モデルから～」を開催しました。概要は以下の通りです。

### ◇開催概要

日時：2025年2月22日（金）14～16時

場所：白金キャンパス2号館2202教室

講師：飯野由里子さん（東京大学バリアフリー教育開発研究センター）

内容：講演&グループワーク



飯野由里子さん

まず、学習会では、フェミニズム理論を専門としてきた飯野さんが、障害の社会モデルと出会った経緯についてお話してくださいました。飯野さんがはじめて授業を担当した際、障害のある学生が授業を受けていたそうですが、その可能性を想定していなかったことにショックを受けたそうです。その後、東京大学で社会学を専門とする星加良司さんのアシスタントを務めることになり、障害の社会モデルに出会い、その後もバリアフリーの領域に身を置き続けているとお話されました。

飯野さんは、社会モデルを「少数派が経験しているさまざまな不利益を、社会が多数派に合わせて作られているという偏りに原因があるとするもの」と説明しました。対する個人モデルは、そうした不利益の原因をその人たちの心身機能や属性、特性に求める考え方です。社会モデルの大事なポイントを飯野さんは次のように強調しました。「社会モデルとは何らかの社会的な手段でバリアを解消するという考え方も間違いではありません。ですが、一番重要なのはバリアが生じているのは社会が多数派に合わせて作られていることに原因があるという考え方です。この考え方が重要なのは、バリアの発生を個人モデルと社会モデルのどちらのモデルで原因を把握するかで、社会への見方、少数派への見方が違ってくるからです。」そして、社会モデルは、障害に限らず様々な少数派が経験する不利益を考えるうえで重要な視点であるため、様々な領域に広げていきたいと続けられました。

ただし、社会モデルについて一見わかったように思えても、実践することは難しいので、社会モデルの考え方を伝える様々な教材づくりに取り組んできたこと、教材の一部を紹介していただきました。

後半のワークでは、教材の一つである「穴埋め問題」（例：Aさんは、●●のために、バスに乗車することができません）を前後左右の人と3、4名のグループになり、社会モデルの視点から行いました。ワーク後、4つのバリア（物理的バリア、制度的バリア、文化・情報面のバリア、意識上のバリア）という視点から振り返りを行いました。

最後に、飯野さんから「身近に起きている事例を考えて、オリジナルの『穴埋め問題』を作ってやってみてください。身近なことから考えていくと、社会モデルの考え方が日常の中に少しずつ入っていくことになります。」と参加者に投げかけがありました。

アンケートでは、「バリアがなぜ生じるのか？という問いが1番重要で、それは社会が多数派によって作られているからだ、という話が印象的でした」、「個人のせいにはしない」ということを意識していても、実際には自分の中で決めつけや先入観があることに改めて気づいた」といったご意見がありました。

より偏りのない社会に向けて、これからも学習会を開催したいと考えております。次年度も引き続きよろしくお願いいたします。（ソーシャルワーカー 森香苗、竹沢昌子）